上顎に発生したセメント質形成性エプーリスの1例

吉岡 真一・迫田 隅男・福田 仁一・渡辺 安人・上三垣 晋輔
山田 長敬・下川 公一*・白木 康愛*・上野 正康*

A case of epulis cementoplastica of the maxilla

Shinichi YOSHIOKA・Sumio SAKODA・Jinichi FUKUDA・Yasuto WATANABE・Shinsuke KAMIGAKI
Nagayoshi YAMADA・Koichi SHIMOKAWA*・Yasuyoshi SHIRAKI*・Masayasu UENO*

緒 言

「エプーリス」という語は、従来、歯肉上に形成された腫瘍をあらわしていたが、現在では、歯肉、歯槽骨および歯根膜より発生した歯肉の限局性腫瘍に対する臨床名として用いられ、病理組織学的に各種の分類がなされている¹⁻⁶⁾。このうち、腫瘍実質中の石灰化物がセメント質に類似しているセメント質形成性エプーリスの報告は非常にまれである^{3,5-13)}。

最近、われわれは術前に骨形成性エプーリスを疑い、術後、摘出物の病理組織学的検索により、セメント質形成性エプーリスと診断した1例を経験したので報告する。

症 例

患 者： 66歳 男性。

初 診：昭和50年7月 日。

主 訴：上顎前歯部の腫瘍。

既往歴、家族歴：ともに特記すべき事項なし。

現病歴：約15年前、上顎前歯唇側歯肉部の大豆大の腫瘍に気づくが、疼痛を自覚しなかったため、そのまま放置していた。その後、腫瘍は漸次増大し、審美障害、義歯装着困難により、本学第1口腔外科を紹介され来院した。

現 症：体格、栄養状態はともに中等度で、全身的に

は特記すべき事項は認められない。

顔貌は上顎前歯部の腫瘍により、上唇唇部の突出を認める。

口腔内所見では、1から3の唇側歯肉部にわたる胡桃大、有茎性の境界明瞭な腫瘍を認める。腫瘍は健康色を呈しており、表面滑沢で、2本の溝状の浅い凹凸があるが、歯牙の圧痕、潰瘍形成は認められない。腫瘍に圧痛はなく、硬さは弾性硬である。また、周囲歯牙の状態は1、2を支台とする開面冠の架橋義歯が装着されており、歯頸部には歯石の沈着が多量に認められる(写真1)。

X線所見：咬合撮影写真において、腫瘍内に硬組織と思われる点状、塊状のX線不透過像が無数、散在性に認められる。その基底部分は歯槽骨とは遊離しており、歯槽骨頂に軽度の骨吸収像が認められる(写真2)。

臨床診断：骨形成性エプーリス。

処置ならびに経過：局所麻酔下に、12を抜去後、腫瘍を鈍的に剝離し、一塊として摘出した。術後の経過は良好で、再発傾向は認められない。

摘出物の肉眼的所見：腫瘍の大きさは、約2.5×2.5×2.0 cmで、表面平滑、胡桃大を呈している(写真3)。

摘出物の軟X線所見：腫瘍の表層は、1層の透過像を示し、その内部には硬組織と思われる無数の点状、塊状のX線不透過像が散在している(写真4)。

写真1 口腔内所見

九州歯科大学第1口腔外科学教室(主任：山田長敬教授)

*九州歯科大学口腔病理学教室(主任：上野正康教授)

First Department of Oral Surgery, Kyushu Dental College (Chief: Prof. Nagayoshi Yamada)

*Department of Oral Pathology, Kyushu Dental College (Chief: Prof. Masayasu Ueno)

受付日：昭和54年1月16日

写真 2 咬合撮影X線写真

写真 4 摘出物軟X線写真

写真 3 摘出物所見

写真 5 全割組織所見 (H.E. 染色)

摘出物の病理組織学的所見：腫瘍組織を包む外層は、重層扁平上皮で覆われ、上皮突起は著しく内側に伸展している。その直下には、比較的鬆粗な結合組織がみられ、わずかに炎症細胞の浸潤を認める(写真5)。

腫瘍実質は、多数の卵形ないし紡錘形の核を有する線維芽細胞と、縦横に交錯する結合組織線維とを含んだ線維性組織が主体をなしており、その中に類円形の石灰化物が散在性に認められる。この石灰化物は、大小さまざまであり、類円形のものが多数をしめるが、不規則な形を呈するものも認める(写真6)。

これらの石灰化物は、ほとんど細胞の封入を認めず、その外周はヘマトキシリン・エオジン重染色でエオジンに淡染し(写真6)、アザン染色で深青色に染まる1層があり、紡錘形の細胞がこれを取り囲むように配列している。また、ゲメリー染色でこれらの外周の1層に放射状に伸びる線維束が認められ、きわめてセメント質に類

写真 6 組織所見 (H.E. 染色)

似したセメント質粒様物を認める(写真7)。

病理組織学的診断：セメント質形成性エプーリス。

写真 7 組織所見 (ゲメリー染色)

考 察

いわゆるエプーリスは、臨床的に出現頻度が高く報告例も多い。また、エプーリスは、病理組織学的にも組織学的構成を異にする数種のものが含まれており、従来より各種の分類がなされている¹⁻⁶⁾

しかしながら、そのうちセメント質の形成が明らかなものは非常に少なく、われわれが渉猟したかぎりでは、正木 (1938)³⁾、Stafne (1951)⁷⁾、Ishikawa (1957)⁸⁾、Buckman (1958)⁹⁾、好士 (1959)⁵⁾、石川 (1960)¹⁰⁾、石川ら (1969)⁶⁾、川端ら (1973)¹¹⁾、Southam and Venkataraman (1973)¹²⁾、河田ら (1978)¹³⁾ の報告があるのみである。

正木 (1938)³⁾ は、歯齦腫 33 例を繊維性歯齦腫と巨大細胞性歯齦腫に大別し、このうち硬組織形成がみられたものは 5 例であり、セメント質瘤に類似した構造を示すものは 1 例であったと報告している。好士 (1959)⁵⁾ は、エプーリスを炎症性エプーリス、腫瘍性エプーリス、巨細胞性エプーリスに分類し、エプーリス 154 例中 23 例に石灰化物が認められ、セメント質粒に類似した石灰化物が一部に存在する例を報告している。石川ら (1969)⁶⁾ は、エプーリスの線維性組織の中にセメント質に類似した硬組織を形成するものを、セメント質形成性エプーリスと呼称し、その出現頻度は、341 例中 4 例であったと記載している。また、Southam and Venkataraman (1973)¹²⁾ は、エプーリス 155 例中 44 例に石灰化物の存在することを確認し、それらの中にセメント質類似物の認められる例を報告している。

以上のごとく、エプーリス中に硬組織形成のみられるものは少なく、硬組織がセメント質類似物である確率は非常に低い。

本症例は、石川ら (1969)⁶⁾ の分類に従うと、腫瘤実質は線維芽細胞と結合線維を含んだ線維性組織が主体をなしてくること、また、その中に石灰化物が散在性に認められ、この物質はきわめてセメント質に類似した

セメント質粒様物であることから、セメント質形成性エプーリスに該当するものと思われる。

また、これらエプーリスにおける硬組織の形成機序については、従来より、瘢痕化した結合組織に硬組織の新生をきたしたと考える説、エプーリスの中に硬組織の一部として存在したものが、生理的に新生添加を行ったもの、巨細胞性エプーリスが陳旧となり、硬組織を形成するという仮説が提唱され、論議の集中するところであるが、その詳細は不明である。石川ら (1969)⁶⁾ も、線維成分の化生によって形成されるものと、腫瘍性に形成されるものがあり、その区別は必ずしも容易でないと記載している。

本症例においても、セメント質粒様物の形成機序の詳細は不明であるが、セメント質粒様物の中に原生セメント質、あるいは、それらを核として第二セメント質を形成していると思わしめる硬組織像が認められることより、腫瘍性のものではないかと推測している。

一方、セメント質と骨組織とは、発生学的に非常に密接な関係にあり、病的状態においてその鑑別は非常に困難であると考えられている¹⁴⁾。Bernier (1957)¹⁵⁾ は、セメント質では發育増大線がきわめて不規則であり、細胞の封入が少ないこと、また、セメント小窩は橢円形で小管の少ないこと、Harvers 系および Volkman 管を欠くことなどにより、セメント質と骨組織とを鑑別している。また、Waldron and Giansanti (1973)¹⁶⁾ は、セメント質では石灰化物が融合した球状、または円心状を呈し、骨芽細胞、破骨細胞がなく、基質は線維性、疎性組織よりなり、膠原線維束の形態、幅が異なり、これらにより骨と鑑別している。

本症例では、石灰化物が類円形を呈し、石灰化物の發育増大線がきわめて不規則で、細胞の封入も少なく、Harvers 系および Volkman 管もなく、石灰化物周囲の未石灰部より放射状に走行する線維組織が認められ、セメント質粒に類似した石灰化物であることからセメント質と判断した。

なお、線維性組織の中にセメント質形成のみられる腫瘍にセメント質形成線維腫があり、Bhaskar and Jacobway (1966)¹⁷⁾、Hamner et al. (1968)¹⁸⁾、Pedersen (1971)¹⁹⁾、Small and Goodman (1973)²⁰⁾、Waldron and Giansanti (1973)¹⁶⁾、Tayler et al. (1977)²¹⁾ ら、本邦においては、宮崎 (1940)²²⁾、村山 (1941)²³⁾、西村ら (1955)²⁴⁾、藤岡ら (1959)¹⁴⁾、小土肥ら (1966)²⁵⁾、中山ら (1967)²⁶⁾、亀山ら (1971)²⁷⁾、枝ら (1971)²⁸⁾、黒柳ら (1973)²⁹⁾、村田ら (1974)³⁰⁾、佐藤ら (1974)³¹⁾、玉井ら (1974)³²⁾、山田ら (1975)³³⁾、篠崎ら (1978)³⁴⁾ の報告がある。

これらの報告によるセメント質形成線維腫の組織像と本症例の組織像はほとんど同様の所見を呈しているが、前述の報告は中心性に発生したものであり、本症例のご

とく、周辺性にエプーリスの形であらわれたものとはやや趣きを異にするものと考え。近年、エプーリスという語の使用を避ける傾向があり、石川ら(1969)⁶⁾も、セメント質形成性エプーリスと周辺性セメント質形成線維腫とは全く同様な組織像を呈すると述べている。しかしながら、われわれは、エプーリスは歯肉上の腫瘤であることを端的に表現する臨床診断名として有用であると考えており、セメント質形成性エプーリスと診断した。

結 論

66歳、男性の上顎前歯部に発生した腫瘤で、病理組織学的検索によりセメント質形成性エプーリスと診断された症例を経験したので報告した。

引 用 文 献

- 1) 正木 正：所謂「エプーリス」の本態に関する病理組織学的考察。歯科学報 35: 289 1930.
- 2) 正木 正：腫瘍の考え方とエプーリスの分類。歯科学報 43: 523 1938.
- 3) 正木 正：顎腫瘍の病理組織学的所見と其の臨床的意義。臨歯 10: 1058 1938.
- 4) 伊藤秀夫：エプーリス (Epulis)。歯界展望 15: 254 1958.
- 5) 好士和夫：エプーリス (歯肉腫) の臨床的ならびに組織学的研究。口病誌 26: 1666 1959.
- 6) 石川梧朗，秋吉正豊：口腔病理学。Ⅱ巻，永末書店，京都，1969，740頁。
- 7) Stanfne, E.C.: Peripheral fibroma (epulis) that contains a cementum-like substance. Oral Surg 4: 463 1951.
- 8) Ishikawa, G.: A histopathological study of odontogenic tumors. Acta Path Jap 7: 525 1957.
- 9) Buckman, N.: Peripheral odontogenic fibroma with cemento-genesis: report of case. J Oral Surg 16: 163 1958.
- 10) 石川梧朗：歯肉腫瘍について，とくに病理学的方面から(その2)。口病誌 27: 307 1960.
- 11) 川端輝彦，他：Epulis fibrosa cementoplastica の5症例。口科誌 22: 247 1973.
- 12) Southam, J.C. and Venkataraman, B.K.: Calcification and ossification in epulides in man (excluding giant-cell epulides). Arch Oral Biol 18: 1243 1973.
- 13) 河田耕治，他：骨組織とセメント質形成を認めた線維性エプーリスの症例。口科誌 27: 232 1978.
- 14) 藤岡幸雄，他：定型的な組織像をていした歯源性線維腫 “Odontogenic fibroma” の臨床的観察ならびにその発現由来に関する知見補遺。日口外誌 5: 108 1959.

- 15) Bernier, J.L.: The management of oral disease. ed 2, Mosby Co St Louis, 1957, p 729.
- 16) Waldron, C.A. and Giansanti, J.S.: Benign fibro-osseous lesions of the jaws: A clinical-radiologic-histologic review of sixtyfive cases Part II. Benign fibro-osseous lesions of periodontal ligament origin. Oral Surg 35: 340 1973.
- 17) Bhaskar, S.N. and Jacoway, J.R.: Peripheral fibroma and peripheral fibroma with calcification: Report of 376 cases. J Am Dent Asso 73: 1312 1966.
- 18) Hamner, J.E., et al.: Cemento-ossifying fibroma of the maxilla. Oral Surg 26: 579 1968.
- 19) Pedersen, G.W.: Fibro-osseous lesion of mandible: cementifying fibroma: report of case. J Oral Surg 29: 280 1971.
- 20) Small, I.A. and Goodman, P.A.: Giant cemento-ossifying fibroma of the maxilla: report of case and discussion. J Oral Surg 31: 113 1973.
- 21) Tayler, N.D., et al.: Recurrent cementifying fibroma of the maxilla: report of case. J Oral Surg 35: 204 1977.
- 22) 宮崎吉夫：顎骨に発生する特種なる繊維性腫瘍。東京医事新誌 3197: 1634 1940.
- 23) 村山悟朗：顎部に発生する石灰化組織を有する線維性腫瘍に就いての考察。口病誌 15: 452 1941.
- 24) 西村典三，他：下顎骨内に生じた石灰化組織を伴う線維腫 “Odontogenic fibroma” の剖検例とこれが石灰化機転の知見補遺。歯医学 17: 347 1955.
- 25) 小土肥信良，他：下顎に生じたセメント質形成性線維腫の3例。口科誌 15: 181 1966.
- 26) 中山栄雄，他：硬組織を伴う顎骨内線維腫 (Odontogenic fibroma) について，その硬組織由来に関する知見補遺。口科誌 16: 401 1967.
- 27) 亀山嘉光，他：セメント質形成線維腫の1症例。九州歯会誌 25: 127 1971.
- 28) 枝 重夫，他：Cementifying fibroma の1症例。歯科学報 71: 2014 1971.
- 29) 黒柳錦也，他：Cementifying fibroma の3症例。口科誌 22: 633 1973.
- 30) 村田俊弘，他：上顎に発生したセメント質形成線維腫の1例。口科誌 23: 237 1974.
- 31) 佐藤伊吉，他：下顎に生じたセメント質形成線維腫の1例。口科誌 23: 237 1974.
- 32) 玉井健三，他：上顎にみられた Cementifying fibroma の1例。日口外誌 20: 483 1974.
- 33) 山田源一郎，他：Cemento-ossifying fibroma の1症例。口科誌 21: 120 1975.
- 34) 篠崎文彦，他：下顎骨に発生した Cementifying fibroma の1例。日口外誌 24: 928 1978.